佐久市埋蔵文化財調査報告書　第283集

柳　坂　遺　跡　Ⅱ

長野県佐久市布施柳坂遺跡Ⅱ発掘調査報告書

２０２１．１２
佐久市教育委員会

'21 第283集 柳坂遺跡Ⅱ 佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第283集

柳　坂　遺　跡　Ⅱ

長野県佐久市布施柳坂遺跡Ⅱ発掘調査報告書

２０２１．１２

佐久市教育委員会

例　言

1　本書は佐久市による河川改修工事に伴う柳坂遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。
2　事業主体者　　佐久市
3　調査主体者　　佐久市教育委員会
4　遺跡名及び所在地　柳坂遺跡Ⅱ　（ＨＹＳ　Ⅱ）
　　長野県佐久市布施 3629-2、3630-1、3631-2
5　調査期間及び面積　発掘調査期間：令和 2 年 10 月 14 日～令和 2 年 11 月 30 日
　　面積：300 ㎡
6　調査担当者　久保　浩一郎
7　本書の編集・執筆は久保が行った。
8　本調査において出土した遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　例

1　遺構の略称は以下のとおりである。　Ｄ－土坑　Ｍ－溝址　Ｐ－ピット
2　遺構断面図の標高は遺構ごとに統一し、スケールバー上に値を示した。遺物実測図は縮尺 1/4 で掲載し、縮尺が異なる場合は個別に縮尺を記載した。
3　遺構の計測値は以下の値である。

4　スクリーントーンの表示は以下のとおりである。

5　遺物写真番号は遺物実測図に対応し、特に記載のないものは縮尺 1/4 で掲載した。
6　本書で示した方位は真北であり、座標値は世界測地系に準拠している。
7　遺物観察表における（　）値は推定値を、〈　〉値は残存値を示す。
8　第 1 図は、地理院タイルの色別標高図及び陰影起伏図、国土数値情報（行政区域データ）を基に作成した。
9　第 15 図、第 16 図は各遺跡の調査報告書より作成した。

目次

例言
凡例

第Ⅰ章　発掘調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査にいたる経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第３節　調査日誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　第２節　歴史的環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第３節　発掘調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第４節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第５節　遺構・遺物の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第Ⅲ章　遺構と遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第１節　石棺墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　第２節　配石遺構・集石遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第３節　炉址・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第４節　土坑・ピット・溝址・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　第５節　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第Ⅳ章　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

写真図版
抄録

挿図目次

第１図　柳坂遺跡Ⅱ位置図
第２図　本遺跡周辺の遺跡分布図
第３図　グリッド配置図
第４図　調査区基本層序
第５図　調査区全体図
第６図　調査区北側全体図
第７図　調査区南側全体図
第８図　石棺墓遺構図
第９図　配石遺構・集石遺構遺構図
第10図　炉址・土坑・ピット・溝址遺構図
第11図　遺物実測図１
第12図　遺物実測図２
第13図　遺物実測図３
第14図　遺物実測図４
第15図　県内千曲川流域の石棺墓１
第16図　県内千曲川流域の石棺墓２

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査にいたる経緯

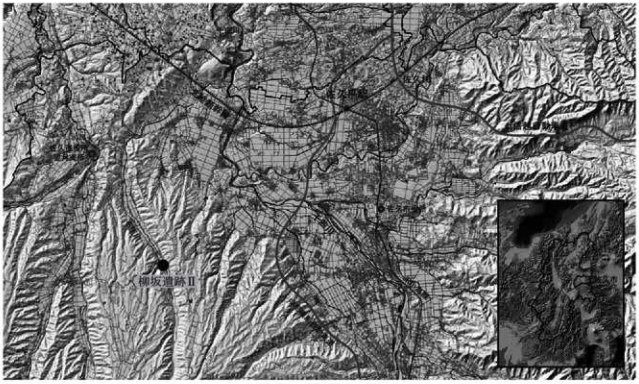
柳坂遺跡は、佐久市西部の布施地籍に所在する縄文時代及び奈良・平安時代の複合遺跡である。現在はほとんどが耕作地となっているが、耕作に伴い縄文土器や石器が出土することで古くより縄文時代の遺跡として認識されてきた。

今回、遺跡内で佐久市による河川改修工事が計画されたことにより、埋蔵文化財の取り扱いについて、佐久市と佐久市教育委員会との間で協議が行われた。令和２年７月17日、文化財保護法第94条第１項、同第184条第１項及び文化財保護法施工令第５条第１項の規定により、佐久市より「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知」が長野県教育委員会に提出された。通知を受け、佐久市教育委員会では令和２年８月３日～５日に遺跡内の工事予定範囲において遺構の確認調査を実施した。

その結果、地表下80㎝程度で黒色土の遺物包含層が確認され、縄文土器が出土した。保護協議の結果、河川工事範囲300㎡について、記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。

調査前風景

試掘調査風景



第１図　柳坂遺跡Ⅱ位置図

第２節　調査組織

調査主体者

佐久市教育委員会	教育長　棚澤　晴樹（～令和３年５月）　吉岡　道明（令和３年５月～）
事　務　局	
社会教育部長	三浦　一浩（令和２年度）　土屋　孝（令和３年度）
文化振興課長	東城　洋（令和２年度）　平林　照義（令和３年度）
文化振興課企画幹	岡部　政也（令和２年度）　谷津　和彦（令和３年度）
文化財調査係長	山本　秀典
文化財調査係	冨沢　一明　上原　学　羽毛田　卓也　小林　眞寿　久保　浩一郎
調査担当者	久保　浩一郎
調　　査　　員	赤羽根　篤　赤羽根　充江　大矢　志慕　桐原　久人　小島　真　清水　律子 田中　ひさ子　羽毛田　利明　比田井　久美子　舟田　和夫　森泉　文恵 森泉　美由起　柳澤　孝子　横尾　敏雄

第３節　調査日誌

令和２年度

７月 14 日	佐久市より、文化財保護法第 94 条第１項に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知。
７月 15 日	２佐教文振第 1216-2 号により長野県教育委員会教育長に副申。
７月 17 日	長野県教育委員会教育長より、２教文第 8-112 号による通知。
８月３日～５日	対象地約 300 ㎡について、４本のトレンチを設定し遺構の確認調査を実施する。その結果、縄文時代の遺物包含層が確認される。
８月６日～	保護協議の結果、河川改修工事による河道建設範囲 300 ㎡について記録保存のための発掘調査を実施することとなる。
10 月 14 日～	重機による表土掘削を開始。排土は調査区横に仮置きする。 仮設事務所および仮設トイレを搬入。
10 月 15 日～	調査区北側から人力による遺構検出作業開始。検出状況の写真撮影後、遺構掘削を開始する。
10 月 21 日～	調査区内に測量用のグリッド杭打設開始。掘削した遺構の記録作成を行う。
11 月 26 日	すべての遺構掘削が終了し、全景写真撮影を行う。
11 月 30 日	仮設事務所等を撤去し、現地での作業を終了する。
12 月１日～	佐久市文化振興課文化財事務所で整理作業を開始。出土遺物の洗浄、注記、接合・復元作業、記録類の整理及び報告書用図面作成を行う。
２月１日～	出土遺物の実測、写真撮影を開始し、報告書執筆を行う。

令和３年度

12 月	発掘調査報告書を刊行し、業務完了。

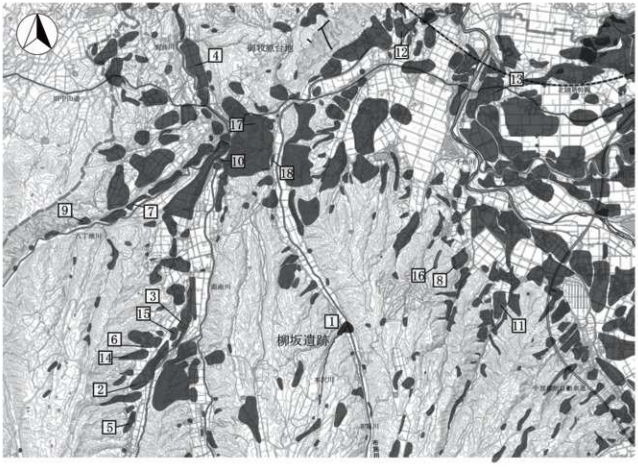
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

佐久市は長野県の中央東端、四方を山地に囲まれた標高約700mの盆地内に位置し、北方には現在も噴煙を上げる浅間山を、南方には雄大な八ヶ岳連峰を望むことができる。

市内の地質を概観すると、千曲川右岸は浅間火山岩類及び浅間軽石流を基盤とし、火山堆積物が河川の浸食を受けて箱型の台地と垂直に切立つ谷とが連なった「田切り」地形が発達する。この田切り地形の台地上に、弥生時代以降の多くの遺跡が分布する。千曲川左岸の佐久市西部地域をみると、北側と南側で地質が異なる。北側は瓜生坂累層・布引累層などの湖沼堆積物を基盤とする御牧原台地・八重原台地が広がり、台地上には古代の窯址群や牧関連遺構などが残る。南側は春日火山岩類・長者原礫層・畳石溶岩などをはじめとする八ヶ岳火山岩類を基盤とした山地であり、本遺跡もこの山間部に位置する。千曲川支流の布施川・鹿曲川、八丁地川などにより南北に伸びる谷が形成され、段丘上に縄文時代以降の遺跡が多数分布している。

柳坂遺跡は、蓼科山麓を北流する布施川と、布施川に注ぐ本沢川との合流地点に位置し、これら河川によって形成された段丘上に遺跡が展開している。今回発掘調査を行ったのは、遺跡中央にあたる布施川左岸である。現在は圃場整備により水田が造成され、本沢川がクランク状に屈曲しているが、本来は本沢川により形成された小扇状地状の東向き緩斜面であったと考えられ、遺構検出面では標高754mを測る。



第２図　本遺跡周辺の遺跡分布図

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺の山間部では、縄文時代の遺跡が多く確認されている（第２図）。早期では松原（浄永坊）遺跡（2）・金塚遺跡（3）、岩清水遺跡(4)、前期では竹之城原遺跡（5）・栃久保Ａ遺跡（6）、下吹上遺跡（7）、榛名平遺跡（8）、で住居址等が確認されている。中期には遺跡数が増加し、平石遺跡（9）、胡桃沢遺跡（10）、中村遺跡（11）、駒込遺跡（12）、海戸田Ａ遺跡（13）などが調査されており、平石遺跡では中期末に位置づけられる柄鏡形敷石住居址等の良好な資料が得られている。本遺跡が形成されるのも中期後半と考えられる。後期は遺跡数が減少するが、平石遺跡と海戸田Ａ遺跡では中期に続き柄鏡形敷石住居が確認されている。浦谷Ｂ遺跡（14）では、住居址こそ確認されていないが、後期から晩期に位置づけられる多量の土器や石器、土製品が出土している。本遺跡でも出土遺物の主体となるのはこの時期である。晩期では浦谷Ｂ遺跡で土器が出土しているに過ぎず、生活の痕跡が希薄となる。

弥生時代には、遺跡分布の中心が千曲川や湯川沿岸に移るが、古墳時代では、後沖遺跡（15）で緑色凝灰岩の剥片等の玉作り関連の遺物が出土している。山麓末端部の尾根上に築かれた瀧の峯１号・２号古墳（16）などは、４世紀から５世紀代の築造と考えられる。また、瓜生坂祭祀遺跡（17）等の存在は古東山道の存在を示唆するものと考えられる。

奈良・平安時代には御牧原台地に勅旨牧である望月牧が成立し、信濃最大の牧として律令体制下において重要な役割を果たす。布施川流域では薬師平遺跡（18）で住居址が確認されている。中世では、木曽義仲の挙兵に参加し、鎌倉幕府においても弓馬の練達者として重用された望月氏などの在地勢力による開発が進められたと考えられる。近世には中山道が整備され、西から望月宿・八幡宿・塩名田宿が形成され、現在の望月・浅科市街地の基礎となる。

第３節　発掘調査の方法

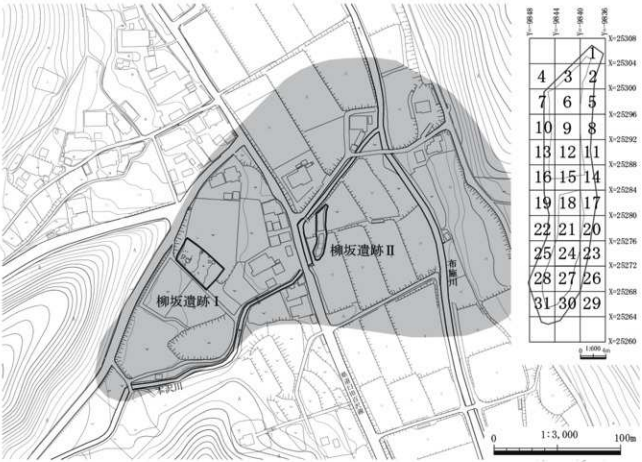
遺構確認面までの表土は重機により除去し、排土は調査区横へ仮置きした。その後調査区内に、国土地理院の平面直角座標系原点第Ⅷ系を基点とする 4m 間隔のグリッドを設定した。調査区北東の X=25308、Y=-9836 を起点とし、北東から南西に向かって数字名を付した（第３図）。グリッド杭打設後は、人力で遺構検出を行い、遺構外出土遺物はグリッドごとに取上げた。検出した遺構については、遺構ごとに遺構埋土の土層観察・記録を行いながら掘下げた。遺構完掘後はグリッド杭を用いた簡易遣方測量及びトータルステーションを用いて平面図を作成した。写真はデジタル一眼レフカメラによる RAW 及び JPEG データと、35mm 一眼レフカメラによるカラーリバーサルフィルムにより記録した。

現場での調査終了後は、佐久市教育委員会文化振興課文化財事務所での整理作業を行った。遺物洗浄、注記、接合、復元、実測を行った後、デジタル一眼レフカメラによる遺物写真撮影を行い、本書の作成については、Adobe 社の Illustrator、Photoshop、InDesign を用いて編集・執筆を行った。

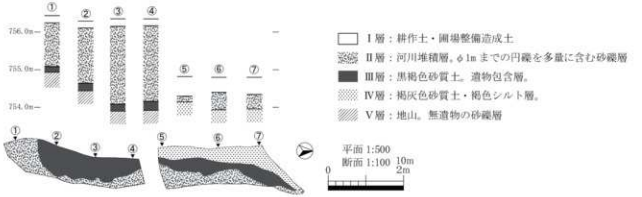
第４節　基本層序

本調査区の土層堆積は第４図のとおりⅠ～Ⅴ層に大別される。Ⅰ層は現代の圃場整備による客土であり、遺物は含まれない。Ⅱ層は直径 1m 程度の大型礫を含む砂礫層で、東流する本沢川による堆積物と考えられる。調査区中央から北側は圃場整備による削平を受けているが、調査区東側はⅡ層がⅣ層を切って堆積しており、河川氾濫により遺構が消失している状況である。9・10 グリッドに限ってはⅡ層とⅢ層の間に河川氾濫堆積と考えられる明褐色砂礫層が認められる。

Ⅲ層は黒色土の遺物包含層、Ⅳ層は褐灰色砂質土ないし褐色シルト層で、遺構検出面はⅢ層及びⅣ層上面である。Ⅲ層からは縄文時代中期後半～後期前半の遺物が出土している。Ⅳ層は礫をほとんど含まず、調査区北西部のみで確認できる。Ⅴ層は地山の砂礫層である。



第３図　グリッド配置図

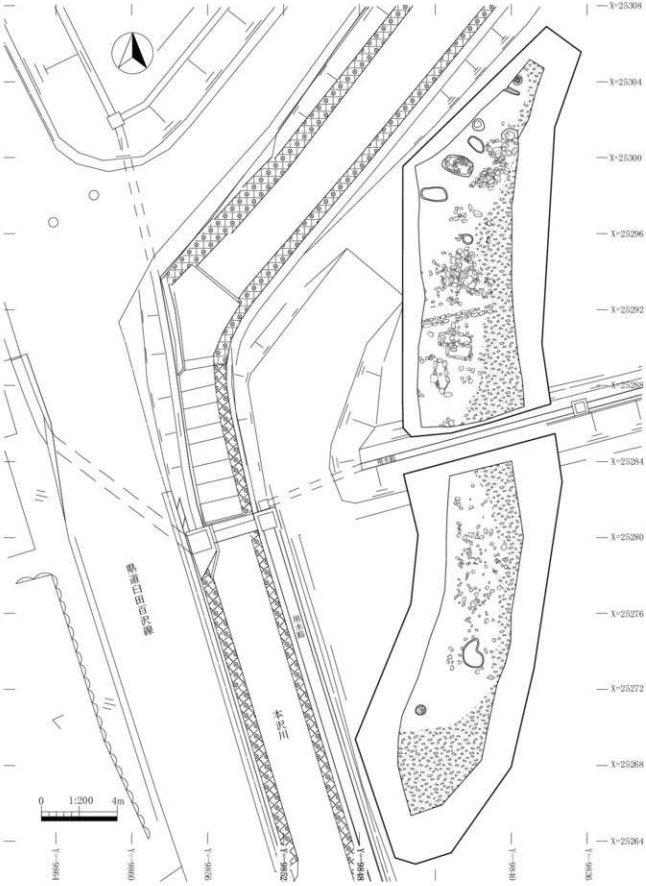


第４図　調査区基本層序

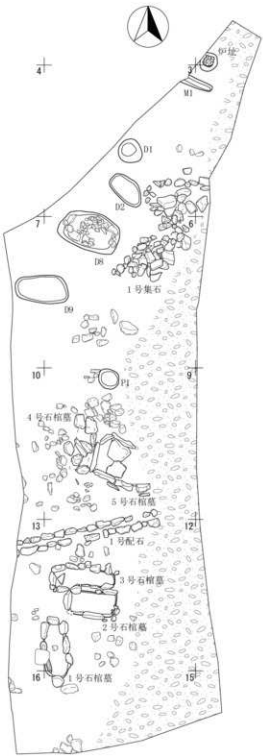
第５節　遺構・遺物の概要

遺構　石棺墓５基、配石遺構２基、集石遺構１基、炉址１基、土坑６基、溝址１条、ピット２基

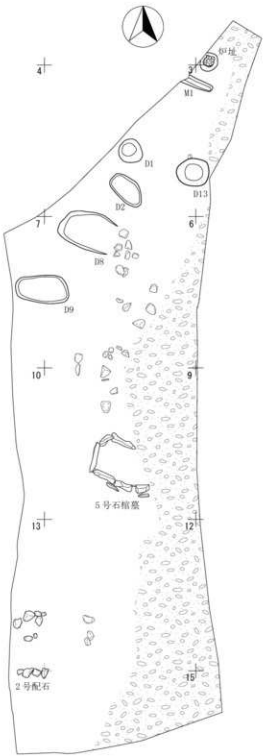
遺物　縄文土器（深鉢、浅鉢、注口土器、ミニチュア土器）、石器（石鏃、打製石斧）、石製品（石皿、石棒、石剣）


X=25308
X=25304
X=25300
X=25296
X=25292
X=25288
X=25284
X=25280
X=25276
X=25272
X=25268
X=25264
Y=-86841
Y=-86840
Y=-86839
Y=-86838
Y=-86837
Y=-86836
Y=-86835
県道白田宮線
水元川
0 1:200 4m

第５図　調査区全体図



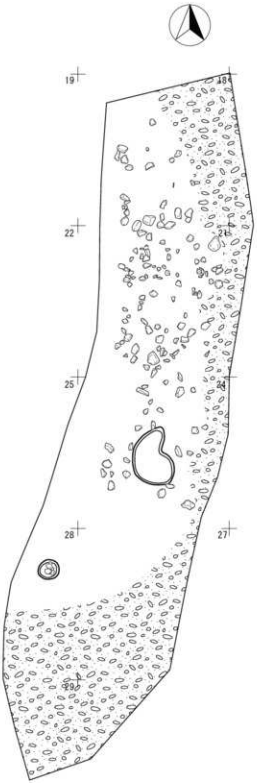
遺構完掘状況（第Ⅲ層上面）



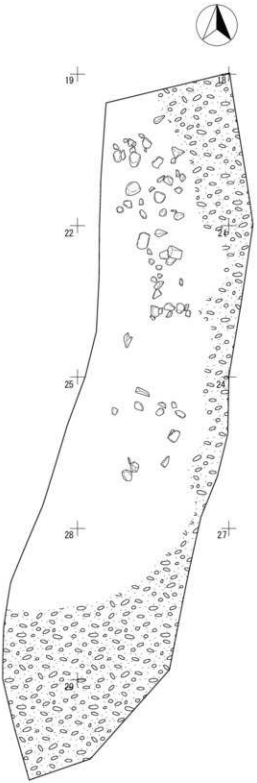
第Ⅲ層掘削後

0　1:100　2m

第６図　調査区北側全体図



遺構完掘状況（第Ⅲ層上面）



第Ⅲ層掘削後

0　1:100　2m

第７図　調査区南側全体図

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　石棺墓

本調査区では５基の石棺墓と考えられる遺構が検出された。遺構内埋土はすべて持ち帰って精査したが、骨や副葬品とみられる遺物は出土しなかった。現場での調査時は土坑として遺構番号を付したが、土坑内に板状礫、扁平礫あるいは円礫が側石として方形に配されるものは、埋葬施設と推定されるため石棺墓と考えた。

１号石棺墓（第８・11図）　調査区北側の12グリッドに位置し、褐色シルト層（第Ⅳ層）上面で検出した。２号配石遺構より新しい。撹乱により西側の側石２つがなくなるが、側石の痕跡がピット状に確認できる。楕円形に近い堀込み内の南北に１個、東西に３個の側石が配され、南東部に隙間ができる。側石に用いられるのは加工されていない扁平礫で、南側の１個は円礫だが平坦面が内側に向けられている。敷石や蓋石は確認できなかったが、検出面中央に小型の扁平礫が検出されており、墓坑上に配石がなされていた可能性はある。墓坑底面で長軸1.34m、短軸0.48mを測り、主軸はW-4°－Nである。検出面から底面までの深さは0.18mである。

遺物は後期初頭の称名寺式とみられる土器片（1）が出土している。出土遺物から本址は後期以降に位置づけられる。

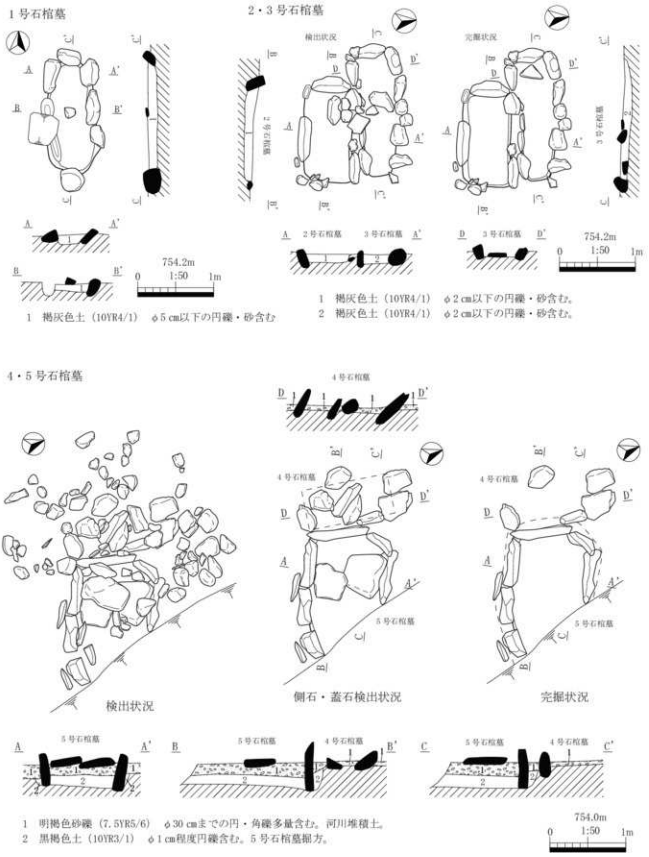
２号石棺墓（第８・11図）　調査区北側の12グリッドに位置し、黒褐色砂質土（第Ⅲ層）から褐色シルト層（第Ⅳ層）上面で検出した。長方形を呈し、南北及び西側に側石を有する。南西角には側石が抜けた跡と考えられるピット上の窪みが検出されたが、他には確認できないため、当初から間隔をもって側石が置かれたと考えられる。側石に用いられるのは板状の扁平礫であるが、加工は施されていない。敷石や蓋石は検出されないが、遺構上部、３号石棺墓との間に礫が検出されており、配石がなされていた可能性がある。墓坑底面で長軸1.15m、短軸0.50mを測り、主軸はW-85°－Nである。検出面から底面までの深さは0.14mで、明確な掘方は確認できなかった。北西角の側石が３号石棺墓の側石より上に置かれていることから、本址が新しいと考えられる。

遺物は縄文土器が出土した（２～４）。２は堀之内１式の深鉢頸部、３は加曽利Ｂ式の浅鉢と考えられる。いずれも混入品と考えられるが、遺物から本址は後期中葉以降に位置づけられる。

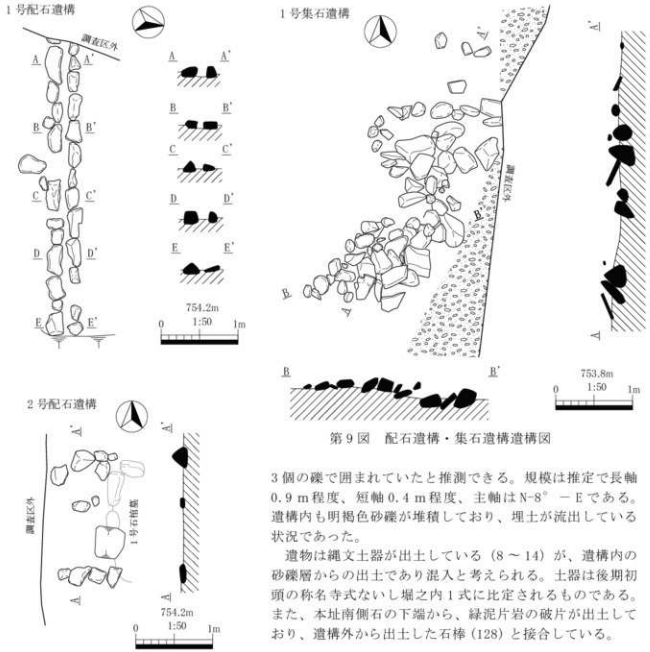
３号石棺墓（第８・11図）　調査区北側の12グリッドに位置し、黒褐色砂質土（第Ⅲ層）から褐色シルト層（第Ⅳ層）上面で検出した。平面形は南側がやや潰れる長方形で、南北及び西側に側石を有する。側石には扁平礫ないし平坦面を持つ円礫が用いられるが、加工は施されていない。敷石や蓋石は検出されないが、西側中央に三角形の扁平礫が置かれている。遺構上部、２号石棺墓との間に礫が検出されており、配石がなされていた可能性がある。墓坑底面で長軸1.52m、短軸0.49mを測り、主軸はW-87°－Nである。検出面から底面までの深さは0.10mで、側石の重なりから、２号石棺墓より古いと考えられる。

遺物は縄文土器と石鏃が出土した（５～７）。５は堀之内１式、６は称名寺式に比定される。７はチャート製の石鏃である。いずれも混入品と考えられるが、本址は後期以降の所産と考えられる。

４号石棺墓（第８・11図）　調査区北側の９グリッドに位置し、褐色シルト層（第Ⅳ層）上位の明褐色砂礫層中で検出した。９・10グリッドでは、Ⅲ・Ⅳ層を切って明褐色の砂礫が堆積しており、小規模な河川の氾濫、あるいは本址付近が河道となった時期があったためと考えられる。本址はこの明褐色砂礫層中で、南北に向い合った扁平礫と、その周辺に平坦面をもつ円礫がまとまって検出された。本来方形に配置された側石であったものが、水流により破壊されたと考えられ、四方をそれぞれ２～


1号石棺墓
2・3号石棺墓
検出状況
完掘状況
2号石棺墓
3号石棺墓
754.2m
754.2m
1:50
0
1m
1　褐灰色土（10YR4/1）　φ5cm以下の円礫・砂含む
1　褐灰色土（10YR4/1）　φ2cm以下の円礫・砂含む。
2　褐灰色土（10YR4/1）　φ2cm以下の円礫・砂含む。
4・5号石棺墓
4号石棺墓
5号石棺墓
検出状況
側石・蓋石検出状況
完掘状況
1　明褐色砂礫（7.5YR5/6）　φ30cmまでの円・角礫多量含む。河川堆積土。
2　黒褐色土（10YR3/1）　φ1cm程度円礫含む。5号石棺墓郷方。
754.0m

第８図　石棺墓遺構図



第９図　配石遺構・集石遺構遺構図

３個の礫で囲まれていたと推測できる。規模は推定で長軸0.９ｍ程度、短軸0.４ｍ程度、主軸はN-8°－Ｅである。遺構内も明褐色砂礫が堆積しており、埋土が流出している状況であった。

遺物は縄文土器が出土している（８～14）が、遺構内の砂礫層からの出土であり混入と考えられる。土器は後期初頭の称名寺式ないし堀之内１式に比定されるものである。また、本址南側石の下端から、緑泥片岩の破片が出土しており、遺構外から出土した石棒（128）と接合している。

５号石棺墓（第８図）　調査区北側の12グリッドに位置し、４号石棺墓同様の明褐色砂礫層中で検出された。東側が河川氾濫（Ⅱ層）により消失しているため全容は不明だが、南北及び西側に側石を有する。側石には厚さ10㎝程度の板状礫が隙間なく立て並べられる。墓坑中央でも側石同様の板状礫が２枚検出されているが、蓋石として置かれた可能性がある。敷石は確認されなかった。墓坑底面で長軸1.45m以上、短軸0.84mを測り、主軸はW-72°－Ｎである。４号石棺墓同様に遺構内には砂礫が堆積し、本来の埋土は流出していると考えられるため本来の墓坑底面は不明だが、砂礫層下には掘方と考えられる黒褐色土が確認でき、検出面から掘方までの深さは0.37mをはかる。

出土遺物は後期と考えられる縄文土器の小片のみであるが、本址の帰属時期は後期以降と考えられる。石材の大きさや並べ方などが他の石棺墓に比べ整っているため多少の時間差は考えられるが、主軸方向がそろっていることから後期のなかに位置づけたい。

第 10 図　炉址・土坑・ピット・溝址遺構図

第２節　配石遺構・集石遺構

目的は不明だが、礫が規則的に並べられたものを配石遺構とし、規則性は認められないが自然堆積とは異なる礫の集中が認められるものを集石遺構とした。

１号配石遺構（第９図）　調査区北側の 12・13 グリッドに位置し、黒褐色砂質土（第Ⅲ層）から褐色シルト層（第Ⅳ層）上面で検出した。西側が調査区外に延び、東側は河川氾濫により消失するが、検出範囲で長さ 3.84 m、幅約 0.4 m、主軸は N-77°　-E を測る。10 ～ 50 ㎝大の扁平な円礫が平行し、明確な掘込みは確認できなかった。石上端の高さが揃えられ、平坦な面を内側に向けて置かれている。

石列の間を遺構内とすれば、本址からは縄文土器が出土している。図化し得ない小破片のみであり、遺構の時期を特定するのは困難だが、検出面が石棺墓と同じで、石上端の高さも石棺墓と同じこと。縄文土器以外の遺物が出土していないことから、石棺墓に近い時期の所産であると考えられる。

２号配石遺構（第９図）調査区北側の 13 グリッドに位置し、Ⅳ層中で検出された。１号石棺墓より下に位置するため、本址の方が古い。南北約 1.7m、東西約 0.9m の範囲で扁平な円礫 11 個が検出され、南側は直線的に並ぶ。南北に側石を有する石棺墓の可能性も考えられるが、土坑状の掘り込みが確認できないため、配石遺構とした。遺物は出土していないため時期は特定できないが、周囲の出土遺物から縄文時代後期以降の所産と考えられる。

１号集石遺構（第９図）　調査区北側の６グリッドに位置し、黒褐色砂質土（第Ⅲ層）上で検出された。大型の礫がまとまっており、Ⅲ層中に含まれない板状礫が複数みられることから、意図的な集石と判断した。東側が河川氾濫により消失しているため全容は不明だが、検出範囲では南北約 3.8m、東西約 1.7m を測る。遺物は縄文時代後期と考えられる土器片が出土していることから、本址は縄文時代後期以降の所産と考えられる。

第３節　炉址

炉跡と考えられる土器埋設遺構が１基検出された。調査区北端の１・２グリッドに位置し、褐色シルト層（第Ⅳ層）上面で検出した。深鉢の底部と同一個体と考えられる体部がその外側に埋設されている（第 11 図 15）。土器内埋土は持ち帰って精査したが骨片等は出土していない。炉石は検出されないが、土器内埋土に炭化物を多量に含むことから炉跡とした。竪穴住居址とみられる掘り込みは確認できなかったが、住居址の一部である可能性は考えられる。

炉体土器は深鉢の体部下半（15）であり、３～４本の沈線で文様が描かれている。堀之内１式に比定される。

第４節　土坑・ピット・溝址

土坑とピットの区分については、検出時点での相対的な大小関係で区分しているため、機能・用途を想定したものではない。また、石棺墓や配石遺構についても調査段階ではすべて土坑として記録しており、報告書作成時に分類して記載しているため、遺構番号は連続していない。

D1 号土坑（第 10･11 図）　３グリッド第Ⅳ層上面で検出され、長軸 1.03m、短軸 0.58m、深さ 0.19m、主軸は W-43°　-N を測る。加曽利Ｂ式と考えられる注口土器など（16・17）が出土した。

D2 号土坑（第 10･11 図）　３グリッド第Ⅳ層上面で検出され、長軸 0.65m、短軸 0.62m、深さ 0.79m、

主軸はW-55° -Nを測る。後期初頭から前葉と考えられる土器（18～21）が出土している。

D8号土坑（第10・11図） 3グリッド第Ⅲ層及び第Ⅳ層上面で検出され、長軸1.64m、短軸1.01m、深さ0.23m、主軸はW-66° -Nを測る。土坑内縁から円礫や扁平礫が検出された。規則的に並べられた状況ではないが、人為的に入れられた可能性がある。遺物は後期と考えられる土器(22)が出土している。

D9号土坑（第10図）は6・7グリッド第Ⅳ層上面で検出され、長軸1.38m、短軸0.74m、深さ0.09m、主軸はW-89° -Nを測る。遺物は縄文土器の小片が出土している。

D10号土坑（第10図） 24グリッド第Ⅲ層上面で検出され、不整形を呈する。長軸1.51m、短軸1.06m、深さ0.07m、主軸はN-16° -Eを測る。縄文土器の小片が出土した。

D13号土坑（第10・11図） 2・3グリッド1号集石遺構下部で検出された。長軸0.86m、短軸0.74m、深さ0.60m、主軸はW-88° -Nを測る。遺物は後期前葉の堀之内1式と考えられる土器など（23～31）が出土している。

P1（第10・12図） 9グリッド第Ⅲ層上面で検出され、長軸0.53m、短軸0.52m、深さ0.17mを測る。加曽利B式と考えられるの浅鉢（32）が出土した。

P2（第10・12図） 28グリッド第Ⅲ層上面で検出され、長軸0.54m、短軸0.52m、深さ0.15mを測る。ピット中央から円礫が検出されている。加曽利B式と考えられる土器（33）が出土した。

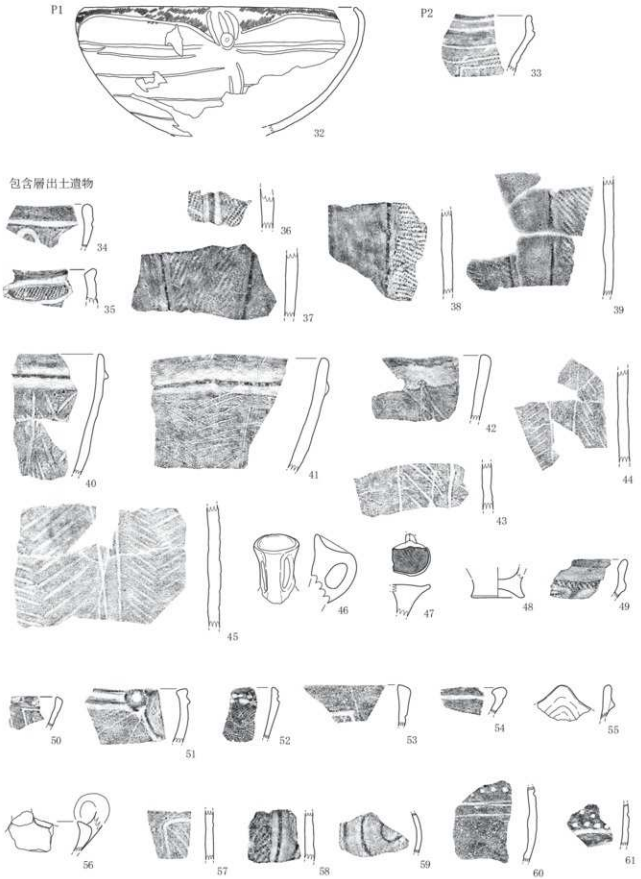
M1号溝址（第10図） 2・3グリッド第Ⅲ層及び第Ⅳ層上面で検出された。西側が調査区外に延びるが、長軸0.79m、短軸0.23m、深さ0.09m、主軸はW-64° -Nを測る。遺物は出土していないが、他遺構に比べ埋土が第Ⅱ層に近いため、比較的新しい時期の溝である可能性がある。

第5節 遺構外出土遺物

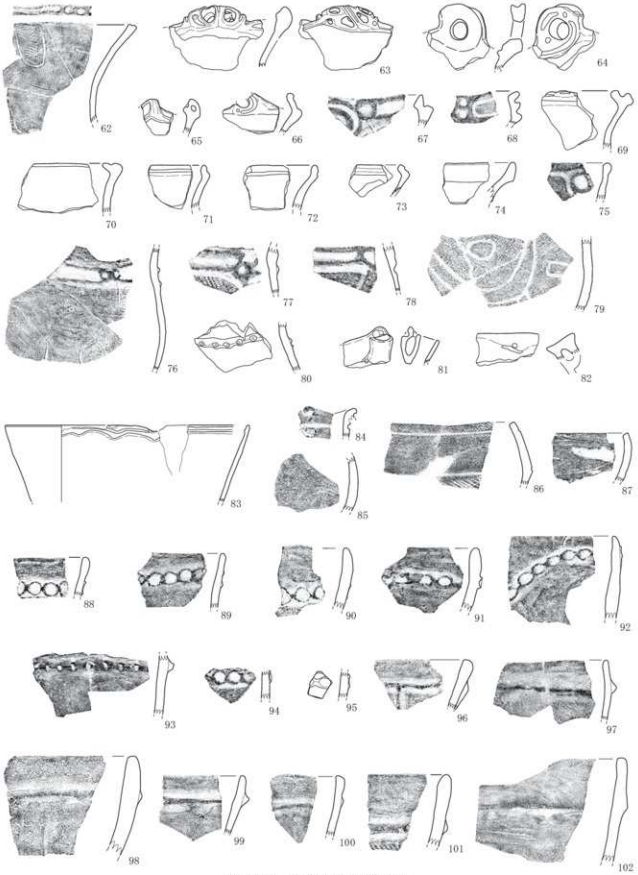
第Ⅱ層及びⅢ層から縄文土器、石器が出土した（第11～13図）。縄文土器は中期末から後期中葉までの幅が認められる。中期に位置づけられるものの出土量は少ないが、18・21グリッド第Ⅲ層を中心に出土した。直線的な縦位隆帯と縄文が施されるもの（36～39）や綾杉状の沈線文をもつもの（40～45）などがある。後期の土器は6～21グリッド第Ⅲ層を中心に出土した。50～60は後期初頭の称名寺式と考えられ、沈線や微隆起線による区画文内に縄文が施される。61は連続刺突文が施される。三十稲場式だろうか。62～82は堀之内1式と考えられる。深鉢主体だが注口土器も認められる。堀之内2式（83～85）、加曽利B式（86・87）に比定されるものもわずかだが出土している。88～113は粗製の深鉢である。88～95には圧痕隆帯、96～102には隆帯が施される。これらの土器は中期末から後期中葉の中に位置づけられる。他にミニチュア土器（114・115）や土器片円板（116）も認められる。

石器は石鏃、打製石斧、石皿、石刀、石棒が出土した。石鏃（117～119）は黒曜石またはチャートで作られている。打製石斧（120～124）は欠損品が多いが、様々な形態が認められる。125は円礫の摂理面を用いた石皿と考えられ、全体に擦痕がみられる。126は三角柱状の礫に粗い研磨と、基部に浅い抉りが施される。小型の石刀と考えられる。127は石棒で、両端を欠くが断面はきれいな円形に成形される。128は緑泥片岩の石棒である。基部縁辺も研磨されているため完形品である。基部が斜めなのは製作途中に折れたか、石材の形状かは不明だが、土中に埋めて立てられていたものだろうか。破片が4号石棺墓の南側石下部から出土している。129は重機掘削中に調査区北側第Ⅱ層中から出土した。一部に敲打による整形が認められ、立石に使われた可能性があるため図示した。

第 11 図　遺構出土遺物図 1



第12図　遺構出土遺物図2・包含層出土遺物図1



第 13 図　包含層出土遺物図 2

第 14 図　包含層遺物図 3

遺構	番号	種別	器種 種類	部位	法量			文様・調整等	備考
					口径 長さ	底径 幅	器高 厚さ		
D3	1	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈8.0〉	口縁突起部に8字状隆帯か	称名寺式
D4	2	縄文土器	深鉢	頸部	—	—	〈4.0〉	円形刺突文、沈線文	堀之内1式
D4	3	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈2.8〉	口唇部刻み、 内面横位沈線と隆帯	加曽利B式
D4	4	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈3.7〉		後期か
D5	5	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈7.0〉	波状口縁	堀之内1式
D5	6	縄文土器	浅鉢	口縁	(18.2)	—	〈8.8〉	口縁突起部に橋状把手か 沈線文	称名寺式
D5	7	石器	石鏃		〈1.85〉	〈1.30〉	〈0.25〉	重量0.41 g　チャート	先端・片脚欠損
D6	8	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈7.4〉	縦位刻み隆帯	堀之内1式
D6	9	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈6.9〉		後期か
D6	10	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈4.7〉		堀之内1式か
D6	11	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈2.9〉		後期
D6	12	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈3.5〉	沈線文、縄文LR	称名寺式
D6	13	縄文土器	深鉢	頸部	—	—	〈2.8〉	沈線文	堀之内1式
D6	14	縄文土器	深鉢	底部	—	〈11.2〉	〈3.3〉		後期か
炉	15	縄文土器	深鉢	底部	—	8.7	〈41.1〉	3・4条単位の沈線文	堀之内1式
D1	16	縄文土器	注口 土器	底部	6.9	5.5	9.5	細密条線、連鎖状沈線、 底部に綱代痕	加曽利B式
D1	17	縄文土器	深鉢	体部	—	—	〈7.2〉		後期か
D2	18	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈3.7〉	沈線	称名寺式
D2	19	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈4.0〉		後期か
D2	20	縄文土器	深鉢	頸部	—	—	〈4.3〉	橋状把手	堀之内1式
D2	21	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈13.1〉	横位隆帯	後期か
D8	22	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈3.5〉	沈線文	後期か
D13	23	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈4.7〉	口唇部沈線	堀之内1式
D13	24	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈2.5〉	波状口縁突起部に沈線	堀之内1式
D13	25	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈5.0〉	波状口縁、横位隆帯	後期か
D13	26	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈4.4〉	圧痕隆帯	後期か
D13	27	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈5.4〉	圧痕隆帯	後期か
D13	28	縄文土器	深鉢	体部	—	—	〈3.3〉	沈線文	堀之内1式
D13	29	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈10.7〉	沈線、円形刺突文	称名寺式
D13	30	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈5.6〉	圧痕隆帯	後期か
D13	31	縄文土器	深鉢	頸部	—	—	〈8.3〉	2条の横位隆帯	後期か
P1	32	縄文土器	浅鉢	口縁	(28.6)	—	〈13.7〉	沈線文・円形刺突文、 口縁部縄文LR	加曽利B式
P2	33	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈6.0〉	横位沈線、縄文	加曽利B式
18Gr	34	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	〈4.6〉	沈線文	中期後葉
6Gr	35	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	〈3.6〉	沈線による区画内に縄文LR	中期後葉
21Gr	36	縄文土器	深鉢	体部	—	—	〈5.3〉	縦位隆帯、縄文RL	中期後葉
18Gr	37	縄文土器	深鉢	体部	—	—	〈6.6〉	縦位隆帯、縄文LR	加曽利E式
18Gr	38	縄文土器	深鉢	体部	—	—	〈8.5〉	縦位隆帯、縄文LR	加曽利E式
21Gr	39	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	〈12.0〉	縦位隆帯、縄文LR	中期後葉
21Gr	40	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	〈11.7〉	横位隆帯、綾杉状沈線	中期後葉
24Gr	41	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	〈12.0〉	横位隆帯、綾杉状沈線	中期後葉
24Gr	42	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	〈6.8〉	綾杉状沈線	中期後葉

第1表　遺物観察表1

遺構	番号	種別	器種 種類	部位	法量			文様・調整等	備考
					口径 長さ	底径 幅	器高 厚さ		
21Gr	43	縄文土器	深鉢	体部	—	—	(5.0)	綾杉状沈線	中期後葉
21Gr	44	縄文土器	深鉢	体部	—	—	(9.5)	綾杉状沈線	中期後葉
21Gr	45	縄文土器	深鉢	体部	—	—	(12.5)	綾杉状沈線	中期後葉
18Gr	46	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(7.3)	口縁部突起、橋状把手	中期末～後期初
21Gr	47	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.4)	口縁部突起、縄文LR	中期末～後期初
18Gr	48	縄文土器	深鉢	底部	—	(5.6)	(3.2)		中期後葉
18Gr	49	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.1)	隆帯上に縄文RL	中期末～後期初
6Gr	50	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(3.2)	沈線、縄文RL	称名寺式
9Gr	51	縄文土器	鉢	口縁部	—	—	(5.7)	円形突起、隆帯	称名寺式
18Gr	52	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(5.4)	刺突文、縄文LR	称名寺式
9Gr	53	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.4)	沈線文	称名寺式
9Gr	54	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(2.8)	沈線文	称名寺式
9Gr	55	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.6)	口縁部突起、隆帯	称名寺式
6Gr	56	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(4.3)	環状の突起か	称名寺式
9Gr	57	縄文土器	深鉢	体部	—	—	(5.2)	沈線区画内に縄文か	称名寺式
18Gr	58	縄文土器	深鉢	体部	—	—	(5.5)	隆帯、縄文RL	称名寺式
21Gr	59	縄文土器	深鉢	体部	—	—	(4.2)	微隆起線	称名寺式
9Gr	60	縄文土器	深鉢	体部	—	—	(7.9)	横位沈線と刺突文	後期前葉
9Gr	61	縄文土器	深鉢	体部	—	—	(4.3)	連続刺突文	三十稲場式か
3・6Gr	62	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(10.5)	口唇部沈線・列点文、 口縁部沈線・縄文LR	堀之内１式
12Gr	63	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(6.6)	口縁部突起	堀之内１式
3Gr	64	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(7.0)	沈線、円形刺突文	堀之内１式
9Gr	65	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.8)	橋状把手	堀之内１式
12Gr	66	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.3)	沈線文	堀之内１式
9Gr	67	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.3)	円形刺突文、隆帯	堀之内１式
3Gr	68	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(3.3)	沈線文、円形刺突文	堀之内１式
3Gr	69	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(6.2)	口唇部沈線、円形刺突文	堀之内１式
3Gr	70	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(5.3)	口唇部沈線	堀之内１式
3Gr	71	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(4.6)	口唇部沈線	堀之内１式
3Gr	72	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(4.8)	口唇部沈線	堀之内１式
24Gr	73	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.4)	口唇部沈線	堀之内１式
6Gr	74	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(4.3)		堀之内１式か
9Gr	75	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.8)	円形刺突文、沈線	堀之内１式
9Gr	76	縄文土器	深鉢	頸部	—	—	(12.7)	横位隆帯、横位の８字状突起	堀之内１式
9Gr	77	縄文土器	深鉢	頸部	—	—	(5.0)	沈線、縄文LR	堀之内１式
12Gr	78	縄文土器	深鉢	頸部	—	—	(4.9)	沈線、縄文	堀之内１式
6Gr	79	縄文土器	深鉢	体部	—	—	(7.7)	沈線文、縄文LR	堀之内１式
12Gr	80	縄文土器	深鉢	頸部	—	—	(5.0)	横位隆帯に円形刺突	堀之内１式
9Gr	81	縄文土器	注口 土器	口縁	—	—	(4.0)	円形刺突文	堀之内１式
12Gr	82	縄文土器	注口 土器	口縁	—	—	(3.5)	橋状把手	堀之内１式か
21Gr	83	縄文土器	深鉢	口縁	(26.0)	—	(8.2)	口縁一部刻み、内面沈線	堀之内２式
9Gr	84	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.2)	８字状突起	堀之内２式
24Gr	85	縄文土器	注口 土器	体部	—	—	(5.9)	細密条線	堀之内２式

第２表　遺物観察表２

遺構	番号	種別	器種 種類	部位	法量			文様・調整等	備考
					口径 長さ	底径 幅	器高 厚さ		
12Gr	86	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(6.6)	口唇部縄文RL、横位沈線、 斜走沈線	加曽利B式
12Gr	87	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(5.2)	羽状沈線	加曽利B式
6Gr	88	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(4.1)	圧痕隆帯	後期か
12Gr	89	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(5.9)	圧痕隆帯	後期か
3Gr	90	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(6.1)	横位圧痕隆帯	後期か
9Gr	91	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(6.8)	圧痕隆帯	後期か
9Gr	92	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(8.8)	圧痕隆帯	後期か
9Gr	93	縄文土器	深鉢	体部	—	—	(6.3)	刻み隆帯	後期か
9Gr	94	縄文土器	深鉢	体部	—	—	(3.0)	圧痕隆帯	後期か
9Gr	95	縄文土器	深鉢	体部	—	—	(2.8)	圧痕隆帯	後期か
21Gr	96	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(5.3)	横位・縦位隆帯	後期か
18Gr	97	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(6.4)	横位隆帯	後期か
29Gr	98	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(10.6)	横位隆帯	
21Gr	99	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(6.2)	横位隆帯	後期か
24Gr	100	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(6.5)	横位隆帯	
21Gr	101	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(7.7)	横位隆帯、縄文RL	後期か
12Gr	102	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(11.2)		後期か
21Gr	103	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(10.7)	横位隆帯	後期か
24Gr	104	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(10.8)		
6Gr	105	縄文土器	深鉢	口縁	—	—	(5.2)		後期か
21Gr	106	縄文土器	深鉢	底部	—	5.1	(2.3)		後期か
3Gr	107	縄文土器	深鉢	底部	—	(10.6)	(4.3)	底部網代痕	後期か
9Gr	108	縄文土器	深鉢	底部	—	(9.0)	(4.0)	底部に網代痕	後期か
3Gr	109	縄文土器	深鉢	底部	—	(11.0)	(2.3)	底部網代痕	後期か
18Gr	110	縄文土器	深鉢	底部	—	(8.0)	(3.2)		後期か
24Gr	111	縄文土器	深鉢	底部	—	(7.6)	(2.7)		
12Gr	112	縄文土器	深鉢	底部	—	10.1	(5.5)		後期か
18Gr	113	縄文土器	鉢	底部	—	(8.2)	(5.2)		後期か
3Gr	114	縄文土器	ミニチュア土器	口縁	—	—	(2.9)	口縁部突起	後期か
29Gr	115	縄文土器	ミニチュア土器	底部	—	3.7	(2.2)		
9Gr	116	土製品	円盤状土製品		2.3	2.3	0.9	縄文LR	
27Gr	117	石器	石鏃		(2.60)	(2.00)	(0.40)	重量1.49 g　黒曜石　片脚先端欠損	
9Gr	118	石器	石鏃		(1.35)	(1.50)	(0.40)	重量0.65 g　黒曜石　先端・片脚欠損	
12Gr	119	石器	石鏃		(1.20)	(1.35)	(0.35)	重量0.72 g　チャート　先端欠損	
6Gr	120	石器	打製石斧		9.7	4.8	1.6	重量81.94 g　珪質粘板岩　完形	
9Gr	121	石器	打製石斧		10.3	4.8	1.5	重量87.36 g　珪質粘板岩　完形	
18Gr	122	石器	打製石斧		(11.4)	(5.4)	1.3	重量91.82 g　硬質砂岩　刃部欠損後再加工か	
21Gr	123	石器	打製石斧		(10.2)	(5.4)	(1.0)	重量79.38 g　輝石安山岩　刃部欠損	
21Gr	124	石器	打製石斧		(8.4)	(4.6)	(1.1)	重量48.87 g　輝石安山岩　刃部欠損	
12Gr	125	石器	石皿か		(15.1)	(9.3)	(1.8)	重量395.0 g　輝石安山岩	
27Gr	126	石製品	石剣		7.60	1.40	0.85	重量13.06 g　硬質砂岩　断面三角形に成形	
3Gr	127	石製品	石棒		(7.9)	(10.4)	(10.3)	重量998.0 g　花崗岩　上下欠損	
9Gr	128	石製品	石棒		54.2	(14.1)	(13.9)	重量1620.0 g　緑泥片岩　基部は斜めに成形	
排土	129	石製品	石棒か		81.7	25.8	16.6	重量50,100 g	

第3表　遺物観察表3

第Ⅳ章　まとめ

本調査区では、石棺墓、配石遺構、集石遺構、炉跡、土坑、ピット、溝址が検出され、遺構内外から縄文時代中期末から後期中葉の遺物が出土した。検出された遺構は縄文時代後期の所産と考えられる。柳坂遺跡Ⅰ（第３図）においても出土遺物の主体は後期前葉であり、西側から舌状に延びる尾根の南東向き緩斜面に、後期の集落が展開していたと考えられる。明確な住居址は検出されていないが、石棺墓と考えられる遺構が検出されたのは大きな成果である。石棺墓と考えられる５基からは骨片や副葬品等の埋葬を証明し得る遺物は出土しなかった。ここでは千曲川流域の類例（第15・16図）と比較しながら本遺跡の石棺墓について考えてみたい。なお各報告書で配石墓と報告されているものも本稿では石棺墓としている。

佐久市内では縄文時代の石棺墓は３遺跡で６基確認されている。千曲川右岸段丘上の海戸田Ａ遺跡では敷石を有するものが確認され、墓坑底面から無文の深鉢底部が出土している。出土遺物から後期前葉に位置づけられる。志賀川右岸台地上の和田上遺跡Ⅱでは後期前葉に位置づけられる４基の石棺墓が検出されており、長方形の墓坑短辺のみに板状礫が立てられる。東部山間地に立地する下茂内遺跡では長軸約2.1mと比較的大型の例が認められる。四方に礫が立てられ、周囲からは晩期の氷Ⅰ式土器が出土しているため、晩期の可能性が考えられる。本遺跡が立地する蓼科山北麓での検出例は少ないが、立科町大庭遺跡において２基が検出されており、２号石棺からは後期前葉とみられる深鉢が出土している。浅間山南麓では多くの石棺墓が確認されている。軽井沢町茂沢南石堂遺跡では、長方形の墓坑内全面に板状礫が立てられ、その上にも板状礫が横積みされる堅牢な作りとなる。墓坑内には加曽利Ｂ式の鉢が伏せられ、遺体に被せたものと考えられる。御代田町宮平遺跡ではそれぞれ部分的な検出ではあるが４基の石棺墓が確認されており、後期に位置づけられる。小諸市石神遺跡では後期中葉に位置づけられる21基の石棺墓が検出されている。長方形ないし楕円形を呈し、単独のものや隣接して切り合うものなど多様な形態が認められる。特にSX07は２体の頭骨に土器が被覆され、埋葬方法を示す好例である。東御市古屋敷遺跡群Ⅱ・辻田遺跡では堀之内２式から加曽利Ｂ式期の例が認められ、辻田遺跡SX03では堀之内２式の土器が伏せられている。千曲市円光房遺跡では後期から晩期までの16基の石棺墓が確認されている。後期に位置づけられる15号石棺墓は巨大な立積を巡らせた墓坑内に板状礫による石棺が築かれる２重構造をなす。また晩期に位置付けられる３・４号石棺墓には敷石が認められ、傍らに埋甕が付帯する構造となる。長野市村東山手遺跡・宮崎遺跡では人骨を伴う例が確認される。宮崎遺跡３号石棺墓では頭骨脇から土製耳飾が出土しており、８号石棺墓は扁平礫を横積みした大規模なものである。晩期の例として、野沢温泉村岡ノ峯遺跡８号石棺墓からは土製耳飾が出土しており、同村蕨平遺跡でも15基の石棺墓が検出されている。

石棺墓に人骨が遺存する例は少ないが、平面形は長方形ないし楕円形、長軸0.9m～2mで1.5m前後のものが多い。側石の積み方は様々だが、側石が全周しないものでも短辺は明確に作られるようである。明確な時期は不明なものが多いが、当地域では後期前葉にはじまり、堀之内式期から加曽利Ｂ式期を主体に晩期までつくられるようである。本遺跡例は、１～３号石棺墓は比較的簡素なつくりと言える。側石が全周しない２・３号石棺墓でも西側の短辺は扁平礫を用いて明確に作られる。３号石棺墓西側底面の三角形礫は頭部下に置かれたものだろうか。５号石棺墓は比較的大きい板状礫が整然と並び、蓋石と考えられる礫も認められる。墓坑の大きさは長軸1m～1.6mを測る。出土遺物は後期初頭称名寺式から加曽利Ｂ式の土器片である。このように構造・規模・時期の点で他遺跡の石棺墓と類似しており、本遺跡例を埋葬施設と捉えることは妥当と考えられる。石棺墓間に位置する１号配石も注目すべき遺構であり、海戸田Ａ遺跡でも時期不明とされるが類似する石列が検出されている。本址は構築面と礫上面の高さが石棺墓と同じことから、近い時期の遺構と考えられ、葬制に関わる遺構である可能性は考えられる。墓域については土壙墓の存在等考慮する必要はあろうが、調査区南側では板状礫や明確な集石が確認できなかったため、調査区北側の第Ⅳ層分布範囲とその西側にかけて展開するものと考えられる。

第15図　県内千曲川流域の石棺墓1

第16図　県内千曲川流域の石棺墓2

調査区全景（南から）

調査区全景（北から）

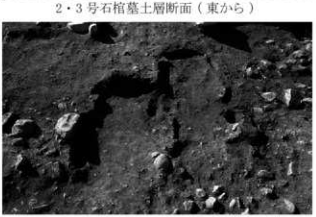
石棺墓検出状況（南から）

1号石棺墓土層断面（東から）

1号石棺墓完掘状況（南から）

2・3号石棺墓土層断面（東から）

2・3号石棺墓完掘状況（東から）

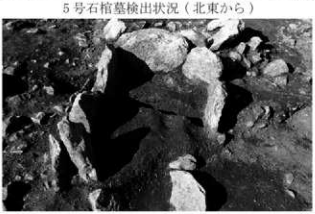

2・3号石棺墓掘方完掘状況（東から）

1～3号石棺墓完掘状況（東から）

4号石棺墓完掘状況（西から）

5号石棺墓検出状況（北東から）

5号石棺墓完掘状況（北東から）

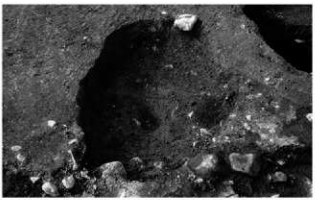


5号石棺墓掘方完掘状況（東から）

2号配石遺構完掘状況（東から）

1号配石遺構完掘状況（東から）

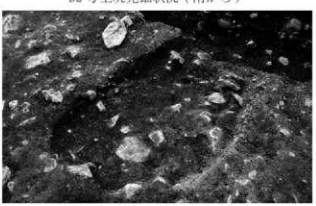
調査区北側完掘状況（南から）



D1 号土坑完掘状況（北から）

D2 号土坑完掘状況（南から）

D8 号土坑完掘状況（北から）

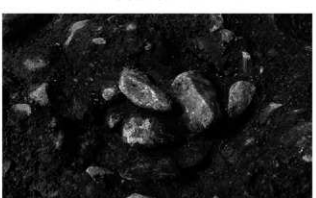


D9 号土坑完掘状況（北東から）

D10 号土坑土層断面（東から）

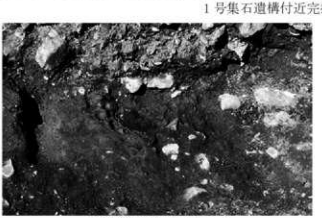
D13 号土坑完掘状況（東から）

P1 完掘状況（東から）

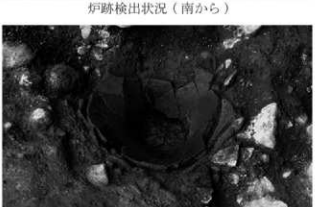


P2 完掘状況（東から）

1 号集石遺構付近完掘状況（南東から）



炉跡検出状況（南から）

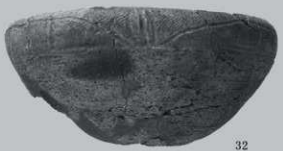


炉跡完掘状況（南から）

調査区南側完掘状況（北から）

1 号石棺墓出土遺物
3 号石棺墓出土遺物
4 号石棺墓出土遺物
2 号石棺墓出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
(1：1)
8
9
10
11
12
13
14
炉跡出土遺物
D1 号土坑出土遺物
15
16
17
D2 号土坑出土遺物
18
19
20
21
D8 号土坑出土遺物
D13 号土坑出土遺物
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

P1・P2 出土遺物


32

33

遺構外出土遺物

34

35

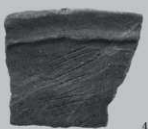
36

37

38

39

40


41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

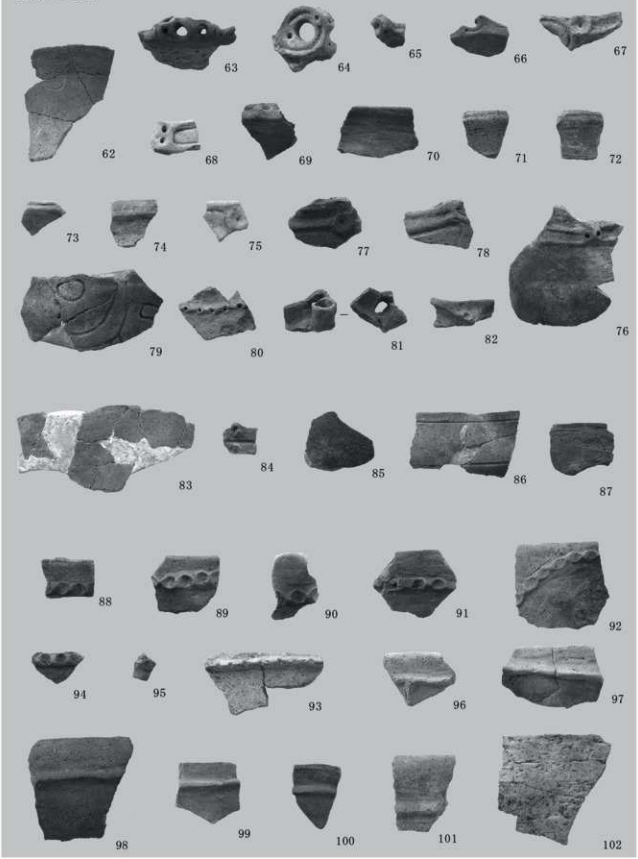
58

59

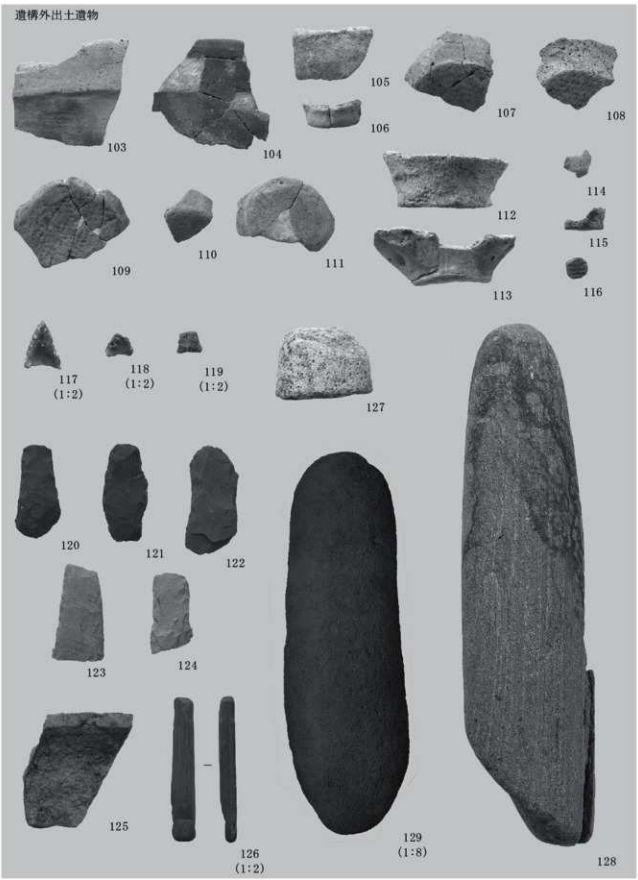
60

61

遺構外出土遺物


62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
77
78
76
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
94
95
93
96
97
98
99
100
101
102

遺構外出土遺物


103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
(1:2)
118
(1:2)
119
(1:2)
127
120
121
122
123
124
125
126
(1:2)
129
(1:8)
128

参考文献

秋田かな子　2008　「加曽利B式土器」　小林達雄編『総覧　縄文土器』　アムプロモーション
浅科村教育委員会　2002　『海戸田A遺跡』
加藤雅士　2007　「関東・中部地方後晩期の石棺墓」『死と弔い　葬制』縄文時代の考古学9　同成社
加納 実　2008　「堀之内式土器」　小林達雄編『総覧　縄文土器』　アムプロモーション
軽井沢町教育委員会　1983　『茂沢南石堂遺跡　総集編』
国土交通省・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　2010
『横壁中村遺跡（11）　縄文時代の列石・配石遺構』
小諸市教育委員会　1994　『石神遺跡群　石神』
鈴木徳雄　2012　「堀之内式土器研究の諸問題－堀之内式の概観と周辺諸形式－」
『第25回縄文セミナー　縄文後期土器研究の現状と課題』　縄文セミナーの会
立科町教育委員会　1990　『大庭遺跡』
中部電力株式会社・佐久市教育委員会　2013
『高師町遺跡群　和田上遺跡Ⅱ　馬瀬口遺跡群　馬瀬口遺跡Ⅱ』
東部町教育委員会・東信土地改良事務所　1986　『不動坂遺跡群Ⅱ　古屋敷遺跡群Ⅱ』
東部町教育委員会　1995　『辻田遺跡』
戸倉町教育委員会　1990　『円光房遺跡』
中島庄一　2008　「称名寺式土器」　小林達雄編『総覧　縄文土器』　アムプロモーション
長野市教育委員会・川田土地改良区　1988　『宮崎遺跡』
日本道路公団東京第二建設局・長野県教育委員会・財団法人長野県埋蔵文化財センター　1992
「下茂内遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1－佐久市内その1－』
日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター　1999　「村東山手遺跡」
『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8－長野市内その6－』
日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター　2000　「岩下遺跡」
『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19－小諸市内3－』　本文編
野沢温泉村教育委員会　1985　『岡ノ峯』
野沢温泉村教育委員会　1994　『蕨平遺跡』
御代田町教育委員会　2000　『宮平遺跡』
望月町誌編纂委員会　1994　『望月町誌』　第三巻　歴史編一　原始・古代・中世編
望月町教育委員会　1984　『竹之城原遺跡　浄永坊遺跡　浦谷B遺跡』
望月町教育委員会　1989　『平石遺跡－緊急発掘調査報告書－』』
望月町教育委員会　1991　『平石遺跡－第2次緊急発掘調査報告書－』』
望月町教育委員会　2005　『平石遺跡－第3次緊急発掘調査報告書－』』

報告書抄録

ふ り が な	やなぎさかいせきに
書　　名	柳坂遺跡Ⅱ
シ リ ー ズ 名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第283集
編 著 者 名	久保　浩一郎
編 集 機 関	佐久市教育委員会　文化振興課
所　在　地	長野県佐久市中込2913　Tel:0267-63-5321　Fax:0267-63-5322
発 行 年 月 日	令和3年(2021)　12月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(㎡)	調査原因
やなぎさかいせきに 柳坂遺跡Ⅱ	さくしふせ 佐久市布施 3629-2 3630-1 3631-2	20217	1091	36° 22′ 78″	138° 39′ 05″	20201014 ～ 20201130	300	河川改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柳坂遺跡Ⅱ	散布地	縄文時代	石棺墓　5基 配石遺構　2基 集石遺構　1基 炉址　1基 土坑　6基 ピット　2基 溝址　1条	縄文土器、石器、石製品、土製品	

要　　約	蓼科山北麓を北流する布施川左岸に立地する、縄文時代後期を主体とする集落跡の発掘調査報告書である。縄文時代後期の所産と考えられる石棺墓5基の他、同時期と考えられる配石遺構・集石遺構が検出された。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第283集
柳坂遺跡Ⅱ

令和3年(2021)　12月
編集・発行　佐久市教育委員会事務局
〒385-8501　長野県佐久市中込3056
社会教育部　文化振興課文化財事務所
〒385-0051　長野県佐久市中込2913
Tel:0267-63-5321

印刷所　　キクハラインク有限会社